

呉市いじめ防止基本方針

平成 26 年 3 月 27 日策定

平成 27 年 4 月 1 日改定

令和 6 年 5 月 1 日改定

令和 8 年 5 月 18 日改定

呉市教育委員会

目次

呉市いじめ防止基本方針（改定版）のポイント・・・・・・・・・・・・・・・・	p 1
1 策定の趣旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p 2
2 いじめの定義等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p 2
(1) いじめの定義	
(2) 具体的ないじめの態様	
(3) いじめを認知する際の留意点	
3 呉市におけるいじめの防止等に関する基本的な考え方・・・・・・・・	p 3
(1) いじめの未然防止	
(2) 児童生徒の主体的な活動の推進	
(3) いじめの早期発見	
(4) いじめ見逃しゼロ	
(5) いじめへの組織的な対応	
(6) 地域や家庭等との連携	
(7) 関係機関との連携	
4 呉市におけるいじめの防止等に関する組織及び取組・・・・・・・・	p 6
(1) いじめの防止等に関する組織	
(2) いじめの防止等に関する取組	
5 学校におけるいじめの防止等に関する組織及び取組・・・・・・・・	p 7
(1) 「学校いじめ防止基本方針」の策定及び見直し	
(2) いじめ防止委員会の設置等	
(3) いじめ事案への組織的な対応	
(4) 児童生徒の主体的な活動の支援	
(5) 生徒指導体制及び教育相談体制の構築	
6 いじめの重大事態への適切な対応と学校における平時からの備え・・	p 13
(1) いじめの重大事態の定義	
(2) いじめの重大事態の基本的な考え方	
(3) いじめの重大事態への対応	
(4) 学校における平時からの備え	
7 「呉市いじめ防止基本方針」の公表及び改定・・・・・・・・	p 15

呉市いじめ防止基本方針（改定版）のポイント ～子どもたちを安全に未来へ送り出す四つの船（Ship）～

「呉市いじめ防止基本方針」改定の四つのポイントを、船（Ship）と重ね合わせて表しました。

「いじめゼロ」を実現するために、「いじめ見逃しゼロ」に向けて取り組みます。

1 児童生徒の成長と発達を支える確かな生徒指導の推進

◆ 「生徒指導の実践上の視点」を中心として、よりよい**人間関係づくり**等に取り組みます。

【生徒指導の実践上の視点】

- ◇ 自己存在感の感受
- ◇ 共感的人間関係の育成
- ◇ 自己決定の場の提供
- ◇ 安全・安心な風土の醸成

【Relationship】
人との関わり

→p. 4-5



2 「学校いじめ防止基本方針」の機能化

◆ 「学校いじめ防止基本方針」を児童生徒や保護者等に周知するとともに、**自分事**として取り組みます。

【児童生徒や保護者、地域住民による主体的な取組】

- ◇ 「学校いじめ防止基本方針」の見直し
- ◇ いじめ撲滅キャンペーン
(年間2回、挨拶運動や児童生徒集会等)
- ◇ いじめ撲滅プロジェクトチーム
(学期に1回以上、会議を開催、情報共有や意見交換)

【Ownership】
主体的な姿勢

→p. 7-11, 13



3 「いじめ防止委員会」の機能化

【いじめ防止委員会】いじめを把握した際の対応チーム。
その他、いじめの未然防止や早期発見等を行う組織

◆ 「いじめ見逃しゼロ」に向け、**組織的かつ実効的**な取組を推進します。

【いじめ防止委員会での対応のポイント】

- ◇ 児童生徒との信頼関係の構築
- ◇ いじめを発見する・気付く
- ◇ いじめ防止委員会につなぐ
- ◇ いじめ防止委員会で向き合う
- ◇ 初動対応の機能化

【Partnership】
組織で協力

→p. 10-11



4 いじめの重大事態への適切な対応と学校における平時からの備え

◆ **平時から**いじめの重大化やいじめの重大事態に**備え**ます。

【学校における平時からの備え】

- ◇ いじめ防止対策推進法、いじめの重大事態の調査に関するガイドライン等についての理解
- ◇ 教育委員会や関係機関との連携
- ◇ 記録等の作成及び保管
- ◇ いじめを重大化させない取組

【Seamanship】
風のうちに準備

→p. 15



1 策定の趣旨

いじめは、相手の人間性とその尊厳を踏みにじる人権侵害行為であり、対象児童生徒の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、その生命又は身体に重大な危険を生じさせるおそれがある。

いじめを防止するためには、いじめを許さない集団づくりを通して、いじめの問題の未然防止を図るとともに、いじめのサインを早期に発見し、早期に対応することが大切である。また、子供たちは、学校だけでなく、家庭や地域など、あらゆる場面で他者と関わりながら成長していくものである。だからこそ、いじめの問題は「学校だけの問題」ではなく、地域に暮らす全ての人々が関心を持ち、できることを一緒に考えることが、子供たちを守ることにつながるとともに、子供たち自身の気付きや声かけ、相談が、いじめを防ぐ大きな力になる。したがって、全ての児童生徒が安心して学校生活を送り、自分の夢の実現に向かって様々な活動に自律的に取り組むことができるよう、地域社会全体でいじめの問題に取り組むことが重要である。

これらのことから、「呉市いじめ防止基本方針」は、いじめ防止対策推進法（平成25年法律第71号。以下「法」という。）第11条の規定に基づき策定された国の基本方針、同法第12条の規定に基づき策定された広島県の基本方針を踏まえ、同法第12条の規定に基づき、呉市におけるいじめの防止等のための対策を総合的かつ効果的に推進するために策定するものである。

2 いじめの定義等

(1) いじめの定義

「いじめ」を、法第2条の規定に基づき、次のとおり定義する。

「いじめ」とは、児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係^{※1}にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響^{※2}を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているものをいう。

※1 「一定の人的関係」とは、学校の内外を問わず、同じ学校、学級・ホームルームや部活動の児童生徒、塾やスポーツクラブ等、当該児童生徒が関わっている仲間や集団（グループ）など、当該児童生徒と何らかの人的関係を指す。

※2 「物理的な影響」とは、身体的な影響のほか、金品をたかられたり、隠されたり、嫌なことを無理矢理させられたりすることなどを意味する。

(2) 具体的ないじめの態様

- ・ 冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる
- ・ 仲間はずれ、集団による無視をされる
- ・ 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする
- ・ ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする
- ・ 金品をたかられる
- ・ 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
- ・ 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
- ・ パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる
- ・ 卑わいなことを言われたり、身体を触られたり、性的な動画・画像を撮影・送信されたりするなど、性的な嫌がらせや性的な行為をされる

(3) いじめを認知する際の留意点

- ア 個々の行為がいじめに当たるか否かの判断は、当該行為を受けている児童生徒が現に心身の苦痛(傷つき)を感じているかどうかという視点に立つて行うこととし、対象児童生徒本人や周辺の状況等を客観的に確認して総合的に判断する。そのことを通して、いじめの積極的な認知につなげる。
- イ いじめの認知件数については、その多寡のみを問題とするのではなく、アンケート調査や教育相談、日常的な実態把握により、早期に発見(認知)し、早期に対応するなど、学校全体で組織的に取り組むことが重要である。
- ウ いじめには、多様な態様があることに鑑み、法の対象となるいじめに該当するか否かを判断するに当たり、「心身の苦痛を感じているもの」との要件が限定して解釈されることのないよう努めること。
- エ いじめの認知は、特定の教職員のみによることなく、法第22条の「いじめ防止委員会」を活用して行うこと。
- オ けんかやふざけ合いであっても、見えないところで被害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行い、児童生徒の感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを判断すること。
- カ 対象児童生徒の立場に立って、いじめに当たると判断した場合にも、その全てが厳しい指導を要する場合であるとは限らないこと。
- キ いじめの中には、犯罪行為として取り扱われるべきと認められ、早期に警察に相談することが必要なものや、児童生徒の生命、心身又は財産に重大な被害が生じるような、直ちに警察に通報することが必要なものが含まれる。これらについては、早期に警察に相談・通報の上、警察と連携して対応する。

3 呉市におけるいじめの防止等に関する基本的な考え方

いじめは「どの子供にも、どの学校でも起こりうるものである」との認識のもと、対象児童生徒の立場に徹底的に立ち、寄り添って対応することを基本とし、児童生徒が傷ついているのかどうかについてしっかりと観察し、ささいな変化に気付くこと、また、

指導や介入の機会を逸することなく、継続して一緒に取り組む姿勢でいることが大切である。

学校及び呉市教育委員会は、常にこの基本的な考え方に立ち返り、一人一人の尊厳の大切さを心に据えながら、就学前より学齢期・青年期に至るまで、一貫して自尊感情や社会的な規範意識等を高めるため、次に示す視点を中心として、取組を推進する。

(1) いじめの未然防止（児童生徒の成長と発達を支える確かな生徒指導の推進）

児童生徒の自己指導能力の獲得を支える生徒指導では、多様な教育活動を通して、児童生徒が主体的に課題に挑戦することや多様な他者と協働して創意工夫することの重要性を実感できることが大切である。そのためには、児童生徒の成長と発達を支える確かな生徒指導を推進し、自他の個性と他者の主体性を尊重しながら、相手の立場に立って考え、自らの行動を決断し、実行する力を育むことや、相互扶助的で、心のふれ合いを基盤とした人間関係づくりに取り組むことを通して、ありのままの自分を肯定的に捉え、「自分も一人の人間として大切にされている」ことを、児童生徒が実感できることが大切である。

そこで、次の「四つの視点」を中心として、取組の充実を図ること。

ア 自己存在感の感受

対等で自由な人間関係を構築する居場所としての「学校、学級・ホームルームづくり」

学校生活において、授業以外にも、部活動や文化祭・体育祭等の行事の運営などの様々な観点から、児童生徒が興味を抱くこと、好きになれること、夢中になれることを探す機会をできるだけ多く提供し、その活動の中で、児童生徒が対等で自由な人間関係を構築できるようにすること。また、児童生徒が、自分が行おうとしていることが認められ、周囲の人から応援してもらっていると感じることによって、学校も自分の居場所であると思えるようにすること。

イ 共感的人間関係の育成

多様性に配慮した「学校、学級・ホームルームづくり」

教室に、多様で異なる考えや意見を出し合える自由な雰囲気を確保し、児童生徒がお互いの違いを理解し、「他者の違いを理解し尊重することが必要である」「多種多様な人がいることで発想の幅が広がり、難しい課題の解決も可能になる」と思えるような機会をつくること。自分と他者の個性をそれぞれに尊重し、相手の立場に立って考え、行動できるようになることにより、共感的で、相互扶助的な人間関係を構築すること。

ウ 自己決定の場の提供

自分が誰かの役に立っていると思える自己有用感を育む

自分への信頼は、主体的に活動に参画することを通して、他者から認められ、他者の役に立っていると実感することにより育まれる。例えば、異年齢交流や学級・ホームルームの係活動、児童会・生徒会活動等において、「何ができるのか」について、児童生徒自身が考える機会を用意し、お互いに助け合いながら積極的に取り組むことにより、児童生徒の自己有用感を育むこと。

エ 安全・安心な風土の醸成

「困った、助けてほしい」と言える環境づくり

困ったときや悩みがあるときに、一人で耐えるのではなく、弱音を吐いたり、人に頼ったり、相談したりすることができる雰囲気があるかどうかは、児童生徒の学校での安全・安心を確保する上で非常に重要である。そうした雰囲気を醸成するためには、「困った、助けてほしい」という声を教職員がしっかり受け止める体制を学校の中に築くことが必要である。日頃の何気ない会話をはじめ、ちょっとした相談にも丁寧に対応することを通じて、児童生徒と教職員との信頼関係を構築し、児童生徒に何か困ったことや悩みが生じた時の「相談してみようかな」というＳＯＳを出しやすい教育的環境を醸成すること。

(2) 児童生徒の主体的な活動の推進

道徳科の授業はもとより、学級・ホームルーム活動、児童会・生徒会活動等の特別活動において、児童生徒がいじめをはじめとする学校生活の課題について考え、議論する活動や、自他の生命の尊厳、尊さを深く考え、かけがえのない存在であることを自覚できる活動等の実施、また、絆を紡ぎ、互いの個性を認め、相手への尊敬と幸せを願う人間関係づくりに取り組むことなど、児童生徒の主体的な活動を指導・支援する。

(3) いじめの早期発見

いじめは、行った側が軽く考える一方で、受けた側が深く傷ついているなど、意識に大きなギャップがあるのが特徴である。いじめの早期発見には、児童生徒の何気ない一言や表情、態度に潜む「ＳＯＳ」のサインといった、「いつもとの違い・変化」に気付くことなど、日々、児童生徒と向き合い、見守っている教職員にしかできない働きかけが重要である。そのため、「傷つき＝心身の苦痛」を尺度として持ちながら、柔軟な想像力と敏感な感受性をもって日常的な教育活動を行い、児童生徒理解を踏まえた向き合いを通して、信頼関係を構築する。

(4) いじめ見逃しゼロ

いじめには、大人には見えにくく、発見することが難しいという特性があり、大人が見逃したり、見過ごしたりする可能性がある。児童生徒のいつもと違う様子や人間関係の変化など、ささいな兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階からの的確に関わりを持ち、いじめを隠したり軽視したりすることなく積極的にいじめを認知する。

また、定期的なアンケート調査（学期に１回以上、児童生徒及び保護者を対象）や教育相談の実施（個別面談の実施）、相談窓口等の周知等により、児童生徒が不安や悩みを抱え込むことなく、相談できる環境を整備し、いじめを見逃さないための体制を構築する。

(5) いじめへの組織的な対応

教育相談や見守り、保護者連携等により、児童生徒の友人関係や精神面等に係る状況の把握に努め、いじめやいじめの疑いがあることが確認された場合、学校は直ちに、対象児童生徒やいじめを知らせてきた児童生徒の安全を確保し、関係児童生徒に対して事情を確認した上で適切に指導することや、呉市教育委員会に報告するなど、特定の教職員が問題を抱え込むことなく、学校全体で情報を共有し、「いじめ防止委員会」を中心に全教職員が対象児童生徒を守り切るという立場に立ち、組織的に対応する。また、児童生徒や保護者が、それ以上の対応を望まない場合も、継続して一緒に取り組む姿勢があることを示していく。なお、いじめを行った児童生徒への指導に当たっては、対象児童生徒の傷つきを認識させて十分な反省を促すとともに、保護者にもいじめの事実を正確に説明し、学校と協力して、成長支援という視点を持ちながら指導する。

(6) 地域や家庭等との連携

より多くの大人が児童生徒の悩みや相談を受け止めることができるようにし、社会全体で子供を見守り、健やかな成長を促すためには、学校、家庭及び地域の連携が必要である。例えば、いじめ撲滅プロジェクトチームや、PTA、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）、学校評議員会等を活用したりするなど、いじめの問題について協議する機会を設けたり、学校、家庭及び地域が連携したりする取組を推進する。

また、子供たちは地域社会の中で生活していることから、地域住民が子供たち一人一人をしっかりと見守り、子供たちの様子が気になることがあれば、すぐに連絡できるような学校と家庭及び地域が組織的に連携・協働するための体制を構築する。

(7) 関係機関との連携

いじめ事案への対応においては、対象児童生徒の安全確保や心のケアを迅速に行うために関係機関（警察、児童相談所、医療機関、法務局等）と連携することが大切である。また、いじめを行った児童生徒に対して必要な教育上の指導を行っているにも関わらず、その指導により十分な効果を上げることが困難な場合などには、呉市教育委員会及び学校と関係機関が適切な連携を行う必要があるため、平素から、関係機関等の担当者の連絡先の把握や、連絡会議の開催等、情報共有の充実を図る。

4 呉市におけるいじめの防止等に関する組織及び取組

呉市は、「呉市いじめ防止基本方針」に基づいて、いじめの防止等のための対策を推進する。

(1) いじめの防止等に関する組織

学校、家庭、関係機関等との連携や法の定める重大事態の調査を行うための組織は、次のとおりとする。

ア 呉市自立支援サポート委員会

「呉市自立支援サポート委員会」は、児童生徒の問題行動に関する機関（学校、呉市教育委員会、警察）に属する者その他関係者（PTA、弁護士等）で構成する。

この委員会は、問題行動に関する調査研究や研究協議等を行うことにより、指導内容・方法等の充実を図り、いじめ等の問題の解決に向けた取組を行う。

イ 呉市いじめ問題等調査委員会

「呉市いじめ問題等調査委員会」は、第三者の専門家（学識経験者、弁護士、医師等）で構成する。この委員会は、「呉市いじめ問題等調査委員会条例」に基づき、学校において、重大事態又は児童生徒の生命、心身又は財産に重大な被害が生じた事態であって、呉市教育委員会がこの委員会による調査が必要と認める事態が発生した場合に、公平性・中立性を確保した調査を行う。

ウ 呉市いじめ問題検証会議

「呉市いじめ問題検証会議」は、呉市長、呉市副市長、呉市総務部長、呉市市民部長及び呉市福祉保健部長で構成する。この検証会議は、重大事態等の調査結果について検証する。

(2) いじめの防止等に関する取組

ア 児童生徒の豊かな情操と道徳心を培い、心の通う人間関係を構築する能力の素地を養うことが、いじめの防止等に資することを踏まえ、全ての教育活動を通じた道徳教育や体験活動等の充実を進める。

イ いじめの防止等のための対策が適切に行われるよう、呉市教育委員会、関係機関、学校、家庭及び地域社会の連携の強化など、必要な体制を整備する。

ウ いじめに関する不安や悩み、相談等について、児童生徒や保護者等が抱え込むことがないよう、「困った」「助けて」と言える雰囲気醸成するとともに、「困った」をしっかり受け止めることができるよう、「呉こどもチャット相談」「24時間子供ＳＯＳダイヤル」「いじめダイヤル24」「もしもし相談電話」等、相談できる体制を整備し、周知する。

エ 保護者が、法第9条に規定された責務等を踏まえて、子供の規範意識を養うための指導等を適切に行うことができるよう、保護者を対象とした啓発活動など、家庭への支援を行う。

オ 「インターネットやＳＮＳ等による投稿・拡散を通じて行われるいじめ」の未然防止及び早期対応に向け、警察と迅速に連携する体制を強化するとともに、保護者や関係機関と連携した取組を展開する。

カ いじめの未然防止や早期発見・早期対応及び「いじめ見逃しゼロ」のための方策等に関する研究及びその成果の普及を行う。

キ いじめの実態把握の取組状況等、学校におけるいじめの防止等の取組の点検・充実を図る。

ク いじめの未然防止や「いじめ見逃しゼロ」等に関する取組が、総合的かつ効果的に推進されるよう、学校に対し必要な指導助言・支援を行う。

5 学校におけるいじめの防止等に関する組織及び取組

学校は、いじめの防止のため、校長のリーダーシップの下、生徒指導体制を確立するとともに、「学校いじめ防止基本方針」に基づき、「いじめ防止委員会」や「いじめ撲

滅プロジェクトチーム」を中心として、いじめの未然防止及び「いじめ見逃しゼロ」等のため、呉市教育委員会等とも適切に連携を図りながら、次のような取組を体系的・計画的に進める。

(1) 「学校いじめ防止基本方針」の策定及び見直し

ア 策定（見直し）の意義

- (ア) 「学校いじめ防止基本方針」に基づく対応が徹底されることにより、特定の教職員が情報を抱え込まず、かつ、学校のいじめ事案への対応が個々の教職員による対応ではなく組織として一貫した対応となること。
- (イ) いじめ事案の発生時における学校の対応をあらかじめ示すことは、児童生徒及びその保護者等に対し、学校生活を送る上での安心感を与えるとともに、いじめの抑止につながる。
- (ウ) いじめを行った児童生徒への成長支援の観点を「学校いじめ防止基本方針」に位置付けることにより、いじめを行った児童生徒への指導・支援につなげる。

イ 策定（見直し）の留意点

- (ア) いじめの未然防止やいじめの早期発見・早期対応及び「いじめ見逃しゼロ」など、いじめの防止等全体に係る内容であること。
- (イ) 「いじめ防止委員会」が組織的かつ実効的に機能するために、具体的な役割・取組等を明確に示すこと。
- (ウ) いじめの防止等に係る年間活動計画を明確に示し、実効性のあるものとする。
- (エ) アンケート調査、個人面談等の実施や、それらの結果の検証及び組織的な対応について定めておくこと。
- (オ) 保護者や地域住民及び関係機関などの意見を取り入れるなど、地域を巻き込んだ方針とすることが、策定後に学校の取組を円滑に進めていく上でも有効であることから、これらの関係者と適時意見交換を重ねながら具体的ないじめ防止等の対策に係る連携について定めることが望ましい。また、児童生徒の意見を取り入れるなど、いじめの防止等について児童生徒の主体的かつ積極的な参加を確保することで、児童生徒自らがいじめの問題について学び、主体的に考え、いじめの防止を訴えるような集団づくりを目指すこと。
- (カ) 学校のホームページや通信などで公開することにより、保護者や地域住民が「学校いじめ防止基本方針」の内容を容易に確認できるようにするとともに、その内容を入学前の説明会、入学時、各年度の開始時などに児童生徒、保護者及び関係機関等に説明すること。
- (キ) 策定した「学校いじめ防止基本方針」が実情に即して適切に機能しているかを、「いじめ防止委員会」や「いじめ撲滅プロジェクトチーム」等で検証し、「いじめ見逃しゼロ」に向けて、毎年度末までに見直しを図ること。
- (ク) 学校評価において、いじめの防止等のための取組に係る達成目標を設定し、達成状況を評価すること。また、評価結果を踏まえ、学校におけるいじめの防止等のための取組の改善を図ること。

(2) いじめ防止委員会の設置等

「いじめ防止委員会」は、いじめを把握した際に「いじめ対応チーム」として対応する組織であり、いじめの未然防止や早期発見・早期対応、その他各種取組を行う組織である。

ア 「いじめ防止委員会」設置の目的等

- (ア) いじめに関する問題を特定の教職員で抱え込むことなく、学校が組織的に対応することにより、教職員、専門的な知識を有する者等の複数の目による状況の見立てが可能となること。
- (イ) 必要に応じて、心理や福祉の専門家であるスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、弁護士、医師、警察官経験者など外部専門家等が参加しながら対応し、より実効的ないじめ事案の解決を図ること。
- (ウ) いじめの未然防止や早期発見・早期対応及び「いじめ見逃しゼロ」を組織的に行うために校務運営組織に位置付けるなど、常設の組織とすること。
- (エ) 「いじめ防止委員会」の設置目的等を、児童生徒及び保護者等に周知すること。

イ 「いじめ防止委員会」の役割

(ア) 未然防止

- a いじめの未然防止及び「いじめ見逃しゼロ」や、いじめを生じさせない環境づくりのため、「いじめの未然防止教育」の充実を図ることや、児童生徒が日常的に「相談しやすい環境づくり」を行うこと。
- b 「いじめの未然防止教育」の例

- ◇ 全ての児童生徒が「いじめをしない」態度や力を身に付けるような働きかけを、生徒指導はもとより、各教科での学習、道徳科や学級活動、児童会・生徒会活動等の特別活動、体験学習、情報モラル教育などを通じて継続的に行う。
- ◇ ソーシャルスキル・トレーニングや構成的グループエンカウンター等を通じて、円滑に他者とコミュニケーションを図る取組を行う。

c 「相談しやすい環境づくり」の例

- ◇ アンケートの名称の工夫（「いじめアンケート」→「生活に関するアンケート」）
 - ◇ アンケートの実施方法の工夫（記名式、無記名式、選択式（児童生徒が選ぶ））
 - ◇ アンケートの回答方法の工夫（学校で回答、自宅に持ち帰って回答）
 - ◇ 長期休業明けの「こころとからだのアンケート」の実施
 - ◇ アンケート実施後に、教職員やスクールカウンセラーによる個別面談の実施
- ※ アンケートや面談等を通じて得た情報を、組織で共有するための場を設定するとともに、確実な事実確認を行い、適切な対応を迅速に行う。

(イ) 早期発見・早期対応

- a いじめの早期発見や「いじめ見逃しゼロ」のため、いじめの相談・通報を受け付ける窓口としての機能を担うこと。
- b いじめの早期発見や早期対応及び「いじめ見逃しゼロ」のため、いじめの疑いに関する情報や生徒指導上の諸課題に係る情報の収集と記録の共有を行うこと。
- c いじめに係る情報（いじめが疑われる情報や児童生徒間の人間関係に関する悩み等）があった際には、緊急会議を開催するなど、いじめとして積極的に認知をするとともに、対象児童生徒及び保護者の意向を確認しつつ、情報の迅速な共有及び児童生徒に対するアンケート調査、聴き取り調査等により事実関係の把握を行うこと。
- d 対象児童生徒に対する支援及び関係児童生徒に対する指導の体制・対応方針の決定と、保護者との連携といった対応を組織的に実施すること。

(ウ) 「学校いじめ防止基本方針」に基づく各種取組

- a 「学校いじめ防止基本方針」に基づく取組の実施や具体的な年間計画の作成，実行，検証及び修正等を行うこと。
- b 「学校いじめ防止基本方針」における年間計画に基づき，次のような内容で校内研修を年間1回以上計画的に実施すること。
 - ◇ いじめの未然防止や「いじめ見逃しゼロ」について
 - ◇ いじめ発生時の対応について
 - ◇ 法や基本方針等の内容について
 - ◇ 心理や福祉の専門家であるスクールカウンセラー，スクールソーシャルワーカー等を活用した教職員のカウンセリング能力等の向上について
- c 「学校いじめ防止基本方針」が学校の実情に即して適切に機能しているかについての点検を行い，「いじめ見逃しゼロ」に向けて，見直しを図ること。

ウ 「いじめ防止委員会」の機能化

(ア) 児童生徒との信頼関係の構築

教育活動全体で児童生徒の成長と発達を支える確かな生徒指導を推進すること。

(イ) 発見する・気付く

- a 日常的な観察や見守り等から「いつもの違い・変化」や「相談・訴え」などを把握した際には，特定の教職員が情報を抱え込むことなく窓口となる教職員（生徒指導主事・学年主任等）に伝えること。
- b 「日常的な観察や見守り」の例
授業中・昼食時間の様子，登下校の様子，休憩時間や放課後の様子，人間関係の変化，アンケート，生活記録ノート（連絡帳）の記載など
- c 児童生徒からいじめや人間関係のトラブル等について相談・訴えがあった際には，後回しにせず，心情や思いに深く寄り添いながら，傾聴の姿勢を大切にすること。

(ウ) つなぐ

- a 早期対応につなげるために、窓口となる教職員（生徒指導主事・学年主任等）は、報告・相談を受けた情報を管理職に報告し、「いじめ防止委員会」につなぐこと。
 - b 管理職は、緊急的な対応が必要か否かを判断するとともに、「いじめ防止委員会」を開催すること。
- (エ) 向き合う
- a いじめが疑われる情報や、児童生徒間の人間関係に関する悩み等を把握した際には、「いじめ防止委員会」において、迅速に情報共有を行い、事実関係を把握するとともに対応方針を明確化すること。
 - b 「いじめ防止委員会」が情報の収集と記録の共有を行う役割を担うため、教職員は、ささいな兆候や懸念、児童生徒からの訴えを、抱え込まずに、又は対応不要であると個人で判断せずに、直ちに全て「いじめ防止委員会」に報告・相談すること。
 - c 「いじめ防止委員会」に集められた情報は、個別の児童生徒ごとに記録するなど、複数の教職員が個別に認知した情報の集約と共有化を図ること。
 - d 「いじめ防止委員会」に、心理や福祉の専門家であるスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを参画させるなど、実効的な機能を果たせるようにすること。
 - e 認知したいじめ事案については、その解消に向けて、全教職員が一丸となり、それぞれの役割を全うすること。
- (オ) 初動対応の機能化
- 特定の教職員の抱え込みを防ぐために、教職員同士が共に支え合い、学び合う同僚性を基盤とした心理的安全性の高い安全・安心な環境を構築すること。

(3) いじめ事案への組織的な対応

ア 「学校いじめ防止基本方針」を踏まえた対応

「いじめ防止委員会」において認知したいじめ事案については、事実関係を確認の上、組織的に対応方針を決定し、対象児童生徒を徹底して守り通すこと。いじめを行った児童生徒に対しては、当該児童生徒の人格の成長を旨として教育的配慮の下、毅然とした態度で指導すること。これらの対応について、教職員全員の共通理解、保護者の協力、呉市教育委員会及び関係機関等との連携のもとで取り組むこと。

イ いじめの防止等に係る児童生徒への指導

- (ア) どのような行為がいじめに当たるのか、対象児童生徒にどのような影響を与えるのか、いじめはどのような構造なのかなど、いじめについて正しく理解させる。
- (イ) 社会体験や生活体験の機会を設け、児童生徒の人間性や社会性を育み、豊かな情操を培う。
- (ウ) 人間関係を築くためのスキルを身に付けるためのトレーニング等を通じて、コミュニケーション能力を育成する。
- (エ) 自分自身がいじめられていることや友人等がいじめられている事実を教職員や家族、相談機関等に伝えることは、適切な行動であることを理解させる。

(オ) 情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度である情報モラルを身に付けさせるため、各教科等との関連も大切にしながら、ネットワーク上のルールやマナーを守ることの意味について考えさせる学習活動や、SNSとの正しい付き合い方等、インターネット上のトラブルを未然に防止するための取組を推進する。

ウ 警察への相談・通報

いじめの中には、SNSを介したインターネット上のいじめ事案、暴力行為やいじめの動画、誹謗中傷等がSNS等に投稿・拡散される事案、匿名性が高く拡散しやすい等の性質を有している児童ポルノ関連のいじめ事案、対象児童生徒又は保護者のいじめを行った側に対する処罰感情が強い事案など、犯罪行為として取り扱われるべきと認められ、早期に警察に相談することが必要なものがある。また、学校の内外で発生した児童生徒の生命、心身又は財産に重大な被害が生じている、又は、その疑いのあるいじめ事案については、法第23条第6項に基づき、直ちに警察に相談・通報の上、警察と連携して対応すること。

エ いじめの解消に向けた取組

認知したいじめ事案は、単に謝罪をもって安易に解消とせず、いじめが「解消している」二つの要件を満たし、他の事情も勘案して判断すること。

<いじめ解消の要件>

① いじめに係る行為が止んでいること

対象児童生徒に対する心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）が止んでいる状態が相当の期間継続していること。この相当の期間とは、少なくとも3か月を目安とする。

② 対象児童生徒が心身の苦痛を感じていないこと

いじめに係る行為が止んでいるかどうかを判断する時点において、対象児童生徒がいじめの行為により心身の苦痛を感じていないと認められること。対象児童生徒本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認する。

(ア) いじめの被害の重大性等から、さらに長期の取組・見守り等の期間が必要であると判断される場合は、この目安に関わらず、呉市教育委員会又は学校の判断により、より長期の期間を設定すること。

(イ) 相当の期間が経過するまでは、対象児童生徒及びいじめを行った児童生徒の様子を含め状況を注視し、期間が経過した段階で判断を行う。行為が止んでいない場合は、改めて、相当の期間を設定して状況を注視すること。

(ウ) いじめが解消に至っていない段階では、対象児童生徒を徹底的に守り通し、「いじめ防止委員会」において、いじめが解消に至るまで対象児童生徒の支援を継続するため、支援内容、情報共有、教職員の役割分担を含む対応プランを策定し、確実に実行すること。

(エ) いじめが「解消している」状態とは、あくまで、一つの段階に過ぎず、「解消している」状態に至った場合でも、いじめが再発する可能性が十分にあり得るこ

とを踏まえ、学校は、当該いじめの対象児童生徒及びいじめを行った児童生徒を、日常的に注意深く観察すること。

(4) 児童生徒の主体的な活動の支援

- ア 児童会・生徒会組織の中に、いじめの防止等のための委員会を設置するなどして、児童生徒が主体的に活動できるよう支援する。
- イ 児童生徒一人一人が児童会・生徒会を中心とした主体的な活動を通して、いじめに対する問題意識を高め、いじめは絶対に許さないという心を育むとともに、発達段階を考慮した継続的な取組及び「いじめ見逃しゼロ」を目指した学校の風土、環境の醸成を図るために、児童生徒、教職員、保護者及び地域が一体となった「いじめ撲滅キャンペーン」を年間2回実施する。
- ウ 学校に、教職員、児童生徒、保護者等による「いじめ撲滅プロジェクトチーム」を設置し、年間を通して、いじめゼロの実現を図る取組を充実させる。いじめ防止に向けた取組状況や、児童生徒及び保護者へのアンケート調査結果等について、「いじめ撲滅プロジェクトチーム」における情報共有や意見交換の場（いじめ撲滅プロジェクトチーム会議）を、学期に1回以上設定する。

(5) 生徒指導体制及び教育相談体制の構築

児童生徒一人一人の発達を支える取組を組織的に進める生徒指導を可能にするため、「チーム学校」として機能する生徒指導体制を構築する。また、児童生徒のレジリエンス（心の回復力）の育成やSOSを出すことができる児童生徒の育成に向けた取組を、年間1回以上実施するとともに、児童生徒が困っていることや助けてほしいことなど、何でも相談できる安全・安心な学校環境づくりに向けて、深い児童生徒理解を基盤とした教育相談体制を構築する。

- ア いじめの防止及びいじめ発生時の対応等に係る保護者・関係機関等との連携を進める。
- イ いじめ発生時の対応マニュアルの作成及び見直しを行う。
- ウ いじめの防止等に係る相談窓口の設置及び広報を行う。
- エ いじめの防止等に係る保護者への啓発及び広報を行う。また、「いじめ撲滅プロジェクトチーム」に「保護者による相談窓口」を設置し、保護者等がいじめに係る相談を行いやすい体制を整備する。

6 いじめの重大事態への適切な対応と学校における平時からの備え

いじめの重大事態へ適切に対応するためには、法、「いじめの重大事態の調査に関するガイドライン」及び「呉市いじめ防止基本方針」を踏まえ、「学校いじめ防止基本方針」を効果的に運用することにより、いじめの積極的な認知や早期発見・早期対応及び「いじめ見逃しゼロ」を徹底するとともに、いじめを重大化させない取組が重要である。

法が定めるいじめの重大事態は、重大な被害等の「疑い」の段階からいじめの重大事態として取り組み、調査の実施に向けて動き出すことが求められており、いじめの重大事態が発生した場合に、迅速かつ適切に対応することができるよう平時から備えておくことが必要である。

(1) いじめの重大事態の定義

いじめの重大事態を、法第28条第1項の規定に基づき、次のとおり定義する。

- 一 いじめにより当該学校に在籍する児童生徒の生命、心身又は財産に重大な被害が生じた疑いがあると認めるとき。
- 二 いじめにより当該学校に在籍する児童生徒が相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認めるとき。

(2) いじめの重大事態の基本的な考え方

ア 法第28条第1項第1号の「生命、心身又は財産に重大な被害」については

- ・ 児童生徒が自殺を企図した場合
- ・ 身体に重大な傷害を負った場合
- ・ 金品等に重大な被害を被った場合
- ・ 精神性の疾患を発症した場合

など、対象児童生徒の状況に着目して判断する。

イ 法第28条第1項第2号の「相当の期間」については、不登校の定義を踏まえ、年間30日を目安とする。ただし、児童生徒が一定期間、連続して欠席しているような場合には、上記目安に関わらず、呉市教育委員会又は学校の判断により、迅速に調査に着手することが必要である。特に、欠席が始まった直後の対応が重要であり、数日程度の欠席であっても、家庭との連携を積極的に行い、背景にある事実関係を整理するなど、組織的な初動対応を徹底することが大切である。

ウ 児童生徒や保護者から、いじめにより重大な被害が生じたという申立てがあったときは、予断を持たず、事実に基づき、報告・調査等に当たる。児童生徒又は保護者からの申立ては、学校が把握していない極めて重要な情報である可能性があることから、調査をしないまま、いじめの重大事態ではないと断言できないことに留意する。

(3) いじめの重大事態への対応

学校は、呉市教育委員会の指導・支援の下で緊急対応チームを編成し、調査等の適切な取組を行うこと。

ア 呉市教育委員会は、当該重大事態に係る事実関係を明確にするための調査（以下「重大事態調査」という。）を行う主体として、学校が主体となるか、呉市教育委員会が主体となるかを判断する。

イ 学校が主体となって調査する場合は、緊急対応チームを編成し、呉市教育委員会の指導助言の下、調査を行い、その結果を呉市教育委員会に報告する。

ウ 呉市教育委員会が主体となる場合は、その判断により、呉市いじめ問題等調査委員会に調査を依頼する。呉市いじめ問題等調査委員会は、学校とともに調査を行い、その結果を呉市教育委員会に報告する。

エ 呉市教育委員会は、イ又はウの調査結果を呉市長に報告する。

オ エの報告を受けた呉市長は、必要と認める場合、次の措置を執ることができる。

(7) 「呉市いじめ問題検証会議」を開催し、報告内容等について検証し、呉市教育

委員会に対して再調査を要請する。

(イ) 呉市教育委員会を通して広島県教育委員会に、「広島県いじめ問題調査委員会」による調査を要請する。

(ウ) 「呉市総合教育会議」を招集する。

(4) 学校における平時からの備え

ア 生徒指導体制及び教育相談体制の確立

学校は、年度初めの職員会議や教職員研修等の実施により、「学校いじめ防止基本方針」はもとより、法やガイドライン等について理解し、いじめの重大事態とは何か、いじめの重大事態に対してどう対処すべきか認識しておくこと。

また、実際にいじめの重大事態が発生した場合には、校長がリーダーシップを発揮し、臨時の「いじめ防止委員会」を開催するなど、各教職員への適切な役割分担等を行い、組織的な対応を行うための生徒指導体制を確立すること。

イ 呉市教育委員会等との連携

学校だけで対応を抱え込むことがないように、平時から呉市教育委員会と連携を緊密に行うとともに、警察や福祉などの関係機関と、いじめに対する措置等について連携を図ること。

ウ 記録等の作成及び保管

重大事態調査においては、学校における対応の検証を行うなど、学校における児童生徒への支援及び指導の記録等が重要な調査資料となるため、「いじめ防止委員会」において会議を開催した際の記録や、児童生徒への指導及び支援を行った際の記録を作成し、保存しておくこと。

また、重大事態調査を行う際は、正確な記録が必要であり、推測や感想のような記録は事実の検証が困難となる可能性があるため、「確認できた事項」と「確認できなかった事項」等の情報を記録として残すこと。

例えば、「いつ」「どこで」「誰が」「誰に」「何を」「どうした」等が明記されていることや、日頃の学校教育活動の中で作成、取得したメモ等をそのままにせず、学校又は呉市教育委員会において定める文書管理規則等に基づいて、適切に管理すること。

エ いじめの重大事態の未然防止

いじめを重大化させないことが重要であり、いじめの未然防止や早期発見・早期対応及び「いじめ見逃しゼロ」に取り組むこと。

また、暴力行為やいじめ等の動画、個人情報等がSNS等に投稿・拡散された場合には、警察等とも連携し、毅然とした対応を行うこと。

7 「呉市いじめ防止基本方針」の公表及び改定

「呉市いじめ防止基本方針」は、呉市（学校安全課）ホームページで公表する。またより実効性の高い取組とするため、検証及び見直しを行うとともに、必要に応じて、改定する。